

干潟に集う若者たち  
～谷津干潟ユースの湿地に関わる取り組みについて～

○池田伸幸・○石井元揮(谷津干潟ユース)

1. はじめに

谷津干潟は高度経済成長期に東京湾の大規模な埋立てが進む中、奇跡的に残された約 40ha の干潟である。水鳥の貴重な餌場、中継地として 1993 年 6 月 10 日に、「ラムサール条約」に登録された。翌年、環境教育、市民参加事業、谷津干潟の保全、国際交流を目指す「谷津干潟自然観察センター」が設立された。その後、登録 20 周年を記念し、2013 年にセンターを拠点として「谷津干潟ユース」が結成された。谷津干潟ユースは自分たちの趣味や関心を行動にし、ワイズユースに繋げ、谷津干潟保全のために活かすことを目的にしている。現在、高校生・大学生計 36 名が在籍しており、谷津干潟の普及啓発や環境保全に努めている。

2. 谷津干潟ユースの活動・取り組み

・谷津干潟の日のイベントへの参加

1997 年に地元の自治体である習志野市は、谷津干潟がラムサール条約に登録された 6 月 10 日を「谷津干潟の日」として制定した。これを受け、毎年 6 月には行政と地域が一体となり谷津干潟保全を促すイベントが開催されている。谷津干潟ユースはこの運営会議に参加し、今年は谷津干潟内で大量繁殖している外来種であるホンビノスガイの密度・移動特性調査報告や干潟立ち入り体験、ホンビノスガイの貝殻を使用したモザイクアートの展示を企画・実施した。

・谷津干潟におけるホンビノスガイの生態調査

谷津干潟ユースは環境省主催の国指定谷津鳥獣保護区保全事業であるホンビノスガイの生態調査に協力しており、2014～2016 年に密度、成長性、移動特性、生存性を調査した。それを受け、谷津干潟ユースでは環境省や有識者の指導の下、ホンビノスガイが干潟全域にどのように分布・密集しているかを調査している。2017 年 7 月の調査では、滞筋に沿って稚貝が流入し分布を広げているのではないかという仮説をもとに、50m ごとにポイントを設けて調べたところ、海側から 100 m 地点まで多く、それより奥部にいくに従い確認されなくなったという結果が得られた。

3. 展望

今後はユース活動を通して我々が知った干潟内の生物の美しさを少しでも多くの人に知ってもらうため、年間のイベント回数を増やし、さらなる普及啓発に努めていきたい。また、ホンビノスガイの生態調査により侵入経路や大まかな分布が明らかになったため、密度が高い場所と低い場所での水質や生物相の差異から、ホンビノスガイが周辺環境にどのような影響をもたらしているのかを調査し、谷津干潟の環境保全に役立てていきたい。

キーワード：谷津干潟自然観察センター、地域との関わり、湿地保全、ホンビノスガイ、ユース